



亡くなった柴田竹子さんの顔をいたわるようになって、ひ孫の恋さん＝滋賀県東近江市で（国森さん提供）

「おかげさんで、元気、元気」。亡くなる数日前に語った竹子さんの最後の言葉が、家族の心に深く刻まれている。病氣とはほとんど無縁だった。早朝五時ごろ起きて畑仕事に出る日課を最晩年まで続けた。二、三年前から認知症の症状が見られたが、山に囲まれた集落での生活は変わらず、気ままに日々を過ごした。ひ孫の恋さん（こを幼少からかわいがり、恋さんも竹子さん

「家でみとれ良かった」

亡くなる一週間前、「もういい」と入れ歯を口から出し、それきり食べなくなった。市内の診療所の医師に診てもらった。老衰が進んでいると告げられた。家族で相談し、このまま自宅で過ごさせると決めた。孫で恋さんの父の剛さん（ご）は「昔から病院が苦手な人。健康管理など自分で何でもやっていたし、本人にとってそれが一番良いと思っただけです」と話す。

竹子さんは食べ物を口にしなければならぬから、徐々に動けなくなり、家族との会話も少しずつ減った。往診に来た医師が死期が近いと伝えた。それを聞いていた恋さんは、しくしくと泣いた。「（八十歳も離れた）ひ孫にあんなに泣いてもらって。本当に幸せなばあちゃんや」と親族の一人が言った。二日後の深夜、竹子さんは家族に苦しみよるな様子を見せることなく、静かに息を引き取った。

翌日、恋さんは身なりを整えた竹子さんと対面した。手で額をそっとなで、冷たさをじかに感じ取った。恋さんは「年がいったも早起きして仕事する、すごいおばあちゃんでした」と生前を振り返った。そして、家でみとれたことに「良かった」と少し笑みを見せた。

「写真」登場・柴田さん家族

国森さんが撮影し、今年二月末、滋賀県東近江市の自宅で、家族にみとられて亡くなった柴田竹子さん＝当時（80）の自宅を訪ねた。

みとりは「命のリレー」

フォトジャーナリスト 国森康弘さんに聞く



くにもり・やすひろ 1974年生まれ。京大大学院経済学研究科修了。神戸新聞記者を経てフォトジャーナリストに。イラクやソマリア、カンボジアなどの紛争地域や貧困地域を巡り、国内では医療問題や旧日本軍兵士を取材。著書に「家族を看取る 心がそばにあればいい」（平凡社新書）など。

ベッドに横たわるお年寄りの手を優しく握る家族。亡くなった曾祖母の顔をなでるひ孫。国森さんの写真は、みとられる人と、家族や介護者の深いきずなを表現している。国森さんは、八十九歳の女性を在宅でみとった家族の話をはじめ、

「幸せな死」が家族の救いに

終末期を考える

と息を引き取り、目に涙が浮かんで来たんです。その瞬間、引き込まれて、シャッターを切れなかったというのが「でも、その場に立ち会えて本当に良かった。人間の生と死はすごいこと実感しました」。

望む最期話しておいて

「死は命のバトンをつないでいくかけがえない出来事。遠ざけるものではなく、温かな人間関係から生まれるみとりによって、「幸せな死」が実現できる。それが残された家族にとっても救いにもなる」

多くの人が亡くなった瞬間の死を望むが、国内では現実には、病院で亡くなる人が八割にも上る。「医療に依存すればするほど、終末期に本人と家族は隔絶されてしまう。それでは心を通わせる大切な時間を失ってしまふ。どこでどう死にたいか、家族で話し始めることが、豊かなみとりにへの第一歩になる。最終的にはケアもしやすくなる」と国森さんは話す。

医療取材班 - iryouhan@chunichi.co.jp



長い不妊治療の末に授かった赤ちゃんを、3カ月でおなかにとどめたまま流産しました。処置手術のため、待合の部屋のベッドで寝ていたら、隣のベッドの患者さんは妊娠中絶手術の前らしく、費用について彼と携帯電話で言い争っていました。子どもができてうっとうしいという言葉が悲しかったんです。私は産みたくて駄目で、隣の人は産める命があるのに捨てる理不尽さに泣けました。体以上に心のダメージが大きい

流産の処置 配慮を ■ 傷に触らず診察

鎌で指を切り、滴る血をタオルで押さえて近くの総合病院へ。先生は「指を曲げて。曲がれば骨折してない」と触るでも血を拭くでもなし。大病院に来るけがではなかったのだから、洗面所に行き、自分で傷口を洗いました。会計を待つ間に、診察室にいた看護師さんが「ごめんなさいね」とほんそうこうをくれました。（愛知県・女性44歳）

「ホンネ外来」は患者や家族、医療関係者が前向きに、医療への思いを語る場です。〒460 8511（住所不詳）中日新聞医療取材班。ファクス0052（2221）1669、上記の電子メールで。〒住所、名前、年齢、職業、連絡先を必ず記入してください。中日新聞医療サイトでも掲載します。